

～8.40m

気象庁は「同じ予報域内でも干満に時間差がありTPOも異なる。地形等の自然条件も異なるので津波高を標高値で広報するのは時間的に不可能」とのコメントであった。以上は気象庁の広報内容の疑問点であるが、現在は、GPS波高計が国交省により全国的に増設され海面の上下値と津波の通過時間は正確に計測される様になっている。また、海底調査や測量等で海底の地形も判明しつつあるので、今後はより複雑な計算で正確な値が報道されるようになると思われる。今のところ、ある学識者の「現状では「津波発生」と聞いたら速やかに高台に逃げること」が正解のようです。気象庁では委員会を設置して「正確な役に立つ津波情報の広報のあり方」を検討しており、決定も近いようです。

3 今後の展開

紙面の都合で②の被災後の生き残り対策まで述べられないが、東日本大震災を経験するまでもなく、これまでの「ハードな施設による防災神話」が脆くも崩れた阪神・淡路震災以降は、ハードによる防災とソフトによる減災の組み合わせが提唱された。現在では、防災は減災の一分野と位置づける学識者も現れているが、施策順に防災を第1のプログラム、減災を第2のプログラムとすれば、東日本大震災後は、官民間問わず被災後の生き残りに対する第3のプログラム？の検討・模索が始まっている。特に小規模な水産加工業者は生産組合単位の10社程度で共同して「被災後の生き残りプロジェクト」を真剣に検討しており、これを県や市町もバックアップしている。機会があれば紹介したいとおもいます。

東日本大震災を宮崎から“体験”して

うちやま まさひと
内山 雅仁

(建設、総合技術監理・宮崎)



まずは、今回の東日本大震災で被災された方に心よりお見舞い申し上げます。また、現場の第一線で復旧・復興に奮闘されておられる建設技術関係者の方々、誠にご苦労さまです。

私は、当日含め震災以降のほとんどの時間を宮崎で過ごしており、震災の直接的な影響を受けていません。関わり合いを敢えて申し上げると、支援活動などを通しての“体験”で、ここにその一端をご紹介します。合わせて私なりに感じたことを述べてみたいと思います。

1) 会社経営を通しての“体験”

私は建設会社を経営していますが、去年は久しぶりに社員全員参加の研修旅行を計画していました。研修先を沖縄にして6月下旬出発の行程で進めていたところに、あの震災が発生。当初は旅行取り止めも選択肢の一つに検討していましたが、最終的には東北地方に行先を変更して視察旅行は行うこと



に決めました。その理由としては①お金を少しでも東北に落とすことで、間接的に地域復興に貢献したい②瓦礫処理の手伝いのボランティア活動を行程の一部に組み込むことで、微力ながら直接的にお手伝いをしたい③被災現場を目のあたりにすることで、自然の力の恐ろしさを肌で感じてほしい。また、震災直後に第一線で活躍した同業者を想起してもらい、その苦悩の姿を自分達の問題として感じてほしい。という想いに強く駆られたからです。

実は、この研修先の変更にあたって、社員の大半からは当初予定通りの場所に行きたいとの声が上がっていました。ギリギリまで自問自答して悩んだ末、東北行きを断行することにしました。旅行を終えた後、「テレビや新聞で見る光景と実際に自分の目で見るそれとは印象が違い、行ってよかった」との

声が聞けてまずは一安心した次第ですが、これから復興の過程を目にすることで、建設技術の力を再認識し、そこに携わっている自分達の存在意義の一端を見出してもらえることを切に願っているところです。

2) 生の声を聞くフォーラム企画を通しての“体験”

「建設トップランナー倶楽部」という任意団体を通じて、建設関係者を対象した震災に関する全国規模のフォーラムの開催に携わらせてもらいました。このフォーラムは、地元自治体や建設業者がどういった状況に直面し、問題にどう対応したのかの証言を聞いてもらう趣旨で開催したのですが、おかげで復旧の問題点、方向性を話し合う場として大いに盛り上がりました。この準備段階で2度現地に赴き、地元自治体関係者や建設会社の方々の話を直接お聞きでき、その中で行政と建設会社のコミュニケーションのあり方、建設会社として災害に対しての向き合い方などを再考させられる上で、貴重な体験をさせてもらいました。

また、3月下旬には宮崎市内で一般の方を対象にした新しい形の震災フォーラム開催する予定です。地元のNPO法人と一緒に企画し、「映画監督の見た被災地」及び「地域リーダーが見た被災地」の2本立てで行います。前者では地元出身で全国的に活躍する映画監督が撮ったボランティア活動の様子を紹介し、後者では仙台市の地域建設業者の方から復旧作業の体験談を紹介してもらい、災害復旧の問題提起などを行ってもらうことにしています。今回のフォーラムを通して、建設技術の貢献度を少しでも多くの一般市民に知ってもらえたら幸いです。



3) 地域まちおこし団体の活動を通じた“体験”

地元宮崎県日向市には、「日向ひょっとこ踊り」という伝統芸能があり、毎年8月にその通りをテーマにした夏祭りが開催されます。私は、たまたま昨年その祭りの実行委員長を務めており、被災地に笑いと元気を届けようと「日向ひょっとこ踊りを東北に届け隊」を結成しました。9月16日から18日までの3日間、総勢37人で宮城・岩手両県の被災地6市7会場を訪問し、踊り披露・講習、義援金贈呈などを通じ、被災地の人たちと交流しました。

当初はまだ気持ちが癒えていないときに「笑い」を届けるなど不謹慎ではないか？と心配していましたが、実際はかなり強行な行程で各会場の到着が遅れ気味だったにもかかわらず、行く先々でみんな温かく迎えてくれました。会場いっぱい笑顔があふれていた光景を目にしたときは、さすがに涙がこみ上げてきました。「震災以降から心の底から笑ったのはこれが初めて！ありがとう」と言って、手を握り締めてくれた体験は、今でも鮮明に思い出します。

技術士として、技術を通じた活動でもこのように人の心を震わせることができたらと感じています。



(E-mail : masahito@uchiyama-const.com)